新8ポ

違うて考わざりし人たち

戸板康二

すでに遠い過去に堕化したことでも済さたければ、遺んでもらえないであろう。夢の詩だの、自分の詞っている新鮮の詩だの、それにかゝはけといふ類は、詩と方ニユアンスが大切である。

ここに書くのは、あえて〝意義〟と称すべきものもない。しかし、その中にはぼくはやはり一種の〝感心〟を、違うて含わざる者のごときものを感じる。そんなこともあるだろうと思ってくれる読者がたゞ、ぼくは満足すべきであろう。

小学校の六年の頃に、九段の房士尼町に住んでいたことがある。ごく最近、ふとした機会で、その時同じ町内に、文学座の俳優夏子が住んでいたのを知った。彼女の記憶はたゞ

それ方士尼町に、冠木門のいかめしい屋敷